

## 文芸資料研究所所蔵

### 『源氏のゆらい』解題・影印・翻刻

上野 英子

#### 一 解 題

実践女子大学文芸資料研究所所蔵の『源氏のゆらい』は、源氏物語の作者・紫式部の経歴・女房名の由来・墓所・石山寺伝説・観音化身説・物語の効用・物語の賞美などを一卷にまとめたものである。内容自体は、鎌倉中期以降の成立とされている『伝為氏筆源氏古系図』の序文や（池田亀鑑氏によれば、こうした序文は「別に一卷にまとめた」、他の本に合載されたりして多数行はれている）<sup>①</sup>とされている）、鎌倉末期から室町初期にかけて成立した『河海抄』をはじめとする諸注釈書の〈料簡〉ないしは〈総論〉相当部分、さらには室町中期頃に成立した『源氏大鏡』の序、また石山寺伝説を記した源氏物語の入門書や梗概書等で、しばしばみかけるものである。

ただし該書の場合、女性向けに七五調の律文形式でまとめ、そして独立した一巻として清書していること、代表的な注釈書に記された通行の説とは異なった記述も散見すること等に特徴があるといえようか。本文中に「……くわんこの初つくり出元和のけふにいたるまでをよそ六百十余年……」とあることから、成立は元和年間と思われる。

現在、管見に入った諸本は該書以外に、蓬左文庫蔵『源氏之作爲』、早稲田大学中央図書館蔵『源氏抄』、東海大学桃園文庫所蔵『源氏ノ義』の三本がある。それぞれ書名が異なるので、本稿では便宜上、これらを総称する場合には記号付きの『源氏のゆらい』として記述を進めたい。

### 【書誌】

#### (一) 文芸資料研究所蔵『源氏のゆらい』

- ・ 詠木箱入り。写一軸（木軸）。
- ・ 紺無地紙表紙。表紙寸法、縦約一八・二糎×横約一四・九糎。外題無し。押竹有り。若草色紐付き（爪無し）。
- ・ 金箔銀砂子散らし見返し。本文料紙は、裏表とも雲母引き空押布目地模様鳥の子紙。
- ・ 紙高一八・二糎。紙幅約四三八・二糎（表紙幅一四・九糎。以下九紙を継ぐ。第一紙幅五一・二糎。第二、第八紙まで各五一・六糎。第九紙一一・〇糎）。
- ・ 内題「源氏のゆらい」。本文冒頭行の字数一四字。各紙平均二六行程度。全冊一筆。
- ・ 奥書・蔵書印・後代書き入れ無し。美装本。
- ・ 平成十六年に大屋書房より購入。

(二) 蓬左文庫蔵『源氏之作爲』(2/21)

- ・写本一冊。列帖装(四孔・朱色糸)
- ・空押布目地模様紺色紙表紙(虫孔よりみて後補表紙か)。表紙寸法、縦二一・二×横一四・九厘。
- ・表紙左肩に白地に青の墨流し模様書題簽貼付。題簽寸法、縦一四・一×横二・九厘。題字「源氏之作爲」(本行とは別筆)。

・見返し白紙。前後遊紙各一丁。本文料紙、雲母引き鳥の子。一部虫損補修済み。

・内題無し。片面九行×一行一八字内外。全冊一筆。

・奥書無し。

・後代書き入れ無し。

・蔵書印「尾府内庫図書」(単郭朱文正方印、尾張藩二世徳川光友以後に用いられた印)「蓬左文庫」(単郭朱文正方印)

(三) 早稲田大学中央図書館蔵『源氏抄』(特別／＼12/4566)

・詠映入り。写本合一冊(前半は文章形式の源氏系図で、所謂『源氏系図小鑑』と仮称されている本の略系統本。後半が該書と一致する)。

・袋綴(四孔・紺色糸)。見返し白紙。前後遊紙各一丁。

・丹表紙。表紙寸法、縦二七・三×横十九・四厘。表紙中央に「源氏抄」と墨書(本行と同筆か)。

・本文料紙楮紙。

・内題無し。片面九行×一行一八字内外。全冊同筆。

- ・前半部奥書「慶長十八年（一六一三）極月日 更記作」<sup>②</sup>。後半部奥書「元和拾年（一六二四）二月日」
- ・前半に朱墨書き入れ、後半に墨筆書き入れ有り。

・蔵書印「中村」（単郭朱文小型丸印。早稲田大学教授中村俊定氏の印。昭和四五年五月に該書を早稲田大学に寄贈）。「早稲田文庫」（単郭朱文長方印）。

#### （四）東海大学桃園文庫蔵『源氏ノ義』（一二一七）

- ・帙入り。写本合一冊（前掲早稲田本と同じ）。

・袋綴（四孔・緑色糸）。見返し白紙。前後に遊紙無し。

・菱繋ぎ地に大輪の花をあしらった空押薄縹色紙表紙。表紙寸法、縦二七・四×横一八・九糎。表紙中央左寄りに「源氏ノ義 作者不知」と墨書（後代の筆か）。

・本文料紙楮紙。全三二紙。

・内題無し。片面一〇行×一行二一字内外。全冊同筆。

・前半部奥書「慶長十八年（一六一三）極月日 更記作」。後半部奥書「元和拾年（一六二四）二月日」

・前半に朱墨書き入れ、後半に墨筆書き入れ有り。墨筆書き入れは前掲早稲田本のそれよりも振り仮名が目立つ。

・蔵書印「忠衡文庫」（単郭朱文正方印。大家忠衡の印か）「池田氏蔵書」（複郭朱文長方印）。

・識語「大正五年三月東京両国美術倶楽部古書籍展覧会ニ於求之／大矢忠衡」（後見返し）

・江戸初期の書写か。虫損・破損箇所あり。



《源氏のゆらい》は四本とも、本文中に次のような文言がある。

- ・実践本「くわんこうの初つくり出元和のけふにいたるまでをよそ六百十余年」
- ・蓬左文庫本「くわんこうのはしめつくりいで元和のけふにいたるまでをよそ六百十四年」
- ・早稲田本「くはんこうのはしめつくりいで元和のけふに至るまでおよそ六百十よ年」
- ・東海本「くわんこうのはしめつくりいで元和げんのけうにいたるまでおよそ六百十よねん」

このうち「六百十四年」とする蓬左文庫本の記述によれば、本書の成立は元和四年（一六一八）ということになる。但し残る三本は「四」を「余」あるいは「よ」としており、断定はできない。一方、早稲田本と東海大本には「元和拾年（一六二四）二月日」という奥書がある（同年二月三十日に寛永と改元）。しかしこれを成立年代とみると、元和十年は寛弘元年より六二〇年目にあたることになり、「六百十よ年」とする本文と齟齬が生じてしまう。「元和拾年」は成立年次ではなく、書写した年次（しかも原本成立後ほどなくしての書写年次）と判断した方がよさそうである。

### 【本文分析】

さてこれらの四本は、写本の体裁上、『源氏系図小鑑』と合冊になっている早稲田本・東海大本グループと、単独で書写された実践本・蓬左文庫本グループとに分類できる。

なおこの『源氏系図小鑑』とはいわゆる源氏物語の文章系図のことで、この書名は諸本の外題がさまざまなため、稲賀敬二氏が命名したものである。池田亀鑑氏によれば永正頃の写本があることから室町中期の成立<sup>③</sup>、稲賀氏によれば天理図書館蔵『源氏巨細』との関連で、応仁の乱前後の十五世紀中頃まで遡る<sup>④</sup>とされており、また同じ『源氏

系図聞書』諸本でも、例えば国立国会図書館蔵『源氏き、がき』のように、『源氏のゆらい』が付いていない本文もある。

ともあれ、『源氏のゆらい』冒頭部分を例に、四本の仮名遣いや漢字平仮名表記法の状況を確認してみると、実践本と蓬左文庫本の場合は次のようになる。

（実践本） 今はむかしゑちせんのかみ為時 とて才覚 ゆふにやさしきは

（蓬左文庫本） 今はむかし越前 のかみためときとてさいかくゆうにやさしきは

むらさき式部か父 なれやその人源氏 をつくり出 こまかなることはかり  
むらさき式部かち、なれやその人けんしをつくりいでこまかなることはかり

姫 にか、せたるなと、かのう治の大納 の物語にみへたるは女 の

むすめにか、せたるなと、かのうちの大納言の物語に見えたるはおんなの

かくへきことならすとほんふのあさきうたかひ也

かくへき事 ならずとばむぶのあさきうたがひなり

右に実践本、左に蓬左文庫本を併記し、表記法や仮名遣いの異同箇所傍線、本文の異文箇所二重傍線を施して

おいたが、一見して明かな如く、僅かな文章の中でもかなりの異同がある。表記法や仮名遣いはそれぞれ全く任意に記しており、両本間に直接的な書承関係あったとは考えにくいようである。これに対して、早稲田本と東海大本の場合には次のようになる。

（早稲田本） 今は昔越前守ためときとてさいかくゆふにやさしきは  
（東海大本） 今は昔越前守ためときとてさいかくゆふにやさしきは

むらさき式部 かち、なれやその人源氏 をつくりいてこまか成 事斗  
むらさきしきぶかち、なれやその人げんしをつくりいてこまかなる事ばかり

むすめにか、せたるなど、彼宇治の大納言の物かたりに見えたるはおんなの  
むすめにか、せたるなど、彼宇治の大納言の物かたりに見えたるはおんなの

書へき事 ならすとはんぶのあさきうたがひ也  
書へきことならすとはんぶのあさきうたかひ也

実践本・蓬左文庫本の場合と比較すると、この両本の類似性は明かだろう。合冊という体裁のみならず、仮名遣いや表記法の面でも、早稲田本と東海大本とは近似している。では共通異文という点ではどうか、総体的に見て四本間

にさして目立った異同はないのだが、なかには次表のような共通異文が抽出できた。なお実践本の頭に振った番号は、当該本文が記された実践本の行番号である（詳細は、後述「二 影印・翻刻」を参照）。

単 独 本		合 冊 本	
行 番 号	実 践 本	蓬左文庫本	早稲田本
61	をりいさせ給ひ	おり居させ給ひ	をりみ給ひ
76	誠に	誠に	誠に
92	よし成公の	よしなりこのうの	よしなりきやうの
11	内てん外てんに	ないでんげでんに	ないでんけてん
119	亦有亦空門	亦有亦空門	やくうやくくう
120	非有非空門の	非有非空門の	ひうひくうの
129	いんの	いんの	ゐんの
140	しん殿	しんてん	しんてん
142	八千度	八千度	ハせん <sup>と</sup> やちたひ
151	二夫	二夫	次ふ
157	女のまなはんに	女のまなはんに	女のはな <sup>ま</sup> ばんに
170	こうしの春秋に	こうしの春秋に	こうしのさてんに
204	(奥書なし)	(奥書なし)	元和拾年二月日
			元和拾年二月日

いずれも実践本と蓬左文庫本が一致し、早稲田本と東海大本に対立した例である。

こうした共通異文のありようからみて、早稲田本と東海大本の間には直接的な書承関係があったか、少なくとも両

本は同じ底本を写したと判断できそうである。またその底本は、奥書の有無、また『春秋』を「さでん（左氏春秋）」という注釈書名にしている点等からみて、単独で書写された実践本や蓬左文庫本の底本とは別の本文だった可能性が強いようである。

四本の関係を以上のように押さえた上で、最後に、実践本の位相を確認してみよう。次にあげるのは、四本の主立った独自異文の例である。猶、行番号は前表と同様、実践本のそれである。

実践本

行番号	独自異文	諸本
5	姫に（実）	むすめに（蓬・早・東）
6	大納（実）	大納言（蓬・早・東）
22	みだうのくわん（実）	みだうのくわんばく（蓬・東） みだうのくはんはく（早）
29	我ゆかり也と（実）	我ゆかりなりあわれみたまへと（蓬） わかゆかり成あはれみ給へと（早） わかゆかりなりあはれみ給へと（東）
36	或説に（実）	あるせつには（蓬・早・東）
41	京（実）	京ごく（蓬） 京極（早） 京ごく（東）
52	をわしますか（実）	ましますが（蓬） ましますか（早・東）
53	いつくしき物に（実）	いつくしきものにおもほし（蓬） いつくしきものにおもほして（早・東）
57	座せんし給ふを（実）	させんし給ふを（蓬・早・東）
65	有けるを（実）	ありけるに（蓬） 有けるに（東） 有けるは（早） 有けるは（早） <sup>れ</sup>
85	たてまつりし（実）	たてまつれば（蓬・東） 奉れば（早）

117	112
毫のあと（実）	まうけんの（実）
筆のうみ（蓬・早・東）	ゆうけんの（蓬・早・東）

蓬左文庫本

165	101	92	83	82
あさからぬ（蓬）	五常の道也（蓬）	ほうなういたしけるよしを（蓬）	と。（かき）そむる（蓬）	おほし出て（蓬）
浅からん（実）	五常の道（実）	ほうなふしたてまつる由（早・東）	とあり（実・東）と有（早）	思召出て（実）おほしめしいて、（早・東）
あさからん（早・東）	五じやうの道（早）	五じやうの道（東）		

早大本

148	147	98	93	86	79
我身をたにもたぬ（早）	これ皆（早）	しゆじやうの（早）	すへて（早）	権大納言きせいに（早）	はんしや（早）
我身をたもたぬ（実・東）	これは又（蓬・東）	下げしゆじやうの（蓬）	すへて此（実・蓬）	権大納言かうぜいに（蓬）	はんにや（実・蓬・東）
我か身をたもたぬ（蓬）		げげしゆじやうの（東）	すへてこの（東）	権大納言行成に（東）	

東海大本

197
てう路くし給つ、（東）
てうあくし給は、（実・蓬・早）

それぞれに小異はあるものの、四本中実践本は最も独自異文が多い。ことに欠字・欠文によるものが目立つ。実践本はきれいに書写された美装本だが、内容自体はよく知られたものだけに、書写者の不注意が原因かと思われる小異が多いようである。

### 【内容上の特色】

《源氏のゆらい》は文中、紫式部の墓所は雲林院にあるとするくだりで「されはむらさき式部名も、そのほとりのゆう閑に兼て心やしめけんと、せうよう院のの給ふ也」と説いている。「せうよう院」とは三条西実隆のことだろうが、しかしこの一文は既に『河海抄』に雲林院の展開で「かねてより紫野雲林院の幽閑を思しめけるも旁ゆへあるにや」とあり、その後の諸注もこれを継承している。実隆が言い出したものではない。とはいうものの、著者にとつては逍遙院がその説を支持したということ自体が重要だったのだろう。この一語からも明らかのように、室町時代の源氏学をリードした三条西家の影響は、本書の中にも確実に流れ込んだようである。次に《源氏のゆらい》の構成を項目順に挙げてみよう。

- 1 源氏物語の作者（宇治大納言物語の為時作者説を否定）
- 2 紫式部が作者であること（紫式部日記・順徳院御記）
- 3 紫式部が俗姓（出仕）
- 4 紫式部と号する事（或説・清輔説）
- 5 紫式部の墓所（逍遙院説）
- 6 物語の発起（石山寺伝説）

7 観音化身説

8 大意

9 源氏物語女性論

10 物語の賞美（鴨長明・藤原俊成）

11 《源氏のゆらい》 著者の結語

このうち、前半1～6までと後半10は、室町後期に三条西実枝がまとめた『明星抄』との共通性が強いようである。なぜなら、1～6各項の展開順序が『明星抄』の順序とはほぼ一致するし、内容的にも同抄の部分抜粋とみることが可能だからである（但し4・5を『明星抄』では5・7・4の順とする。また6で『明星抄』が源氏五十四帖説を採り、大般若經の奉納を否定しているのに対して、本書は六十帖説を採り奉納を事実とする等の部分的相違がある。なおこの点は後述する）。

しかし後半部になると様相が違ってくる。例えば7。『明星抄』では5の最後に「又云作者観音化身也と云々」<sup>5)</sup>と、或説扱いで、単にそういう説もあると軽く流しているのに対して、『源氏のゆらい』では自説として多くの文言を費やしている。8は趣旨こそほぼ同じだが、仏教用語を多用した『明星抄』の難解な記述よりはずっと簡略なものとなっており、部分抜粋ではなく、これまた全面的に書き直したのかと思われる。更に9の源氏物語の登場人物を採り上げての具体的な女性論もまた、『明星抄』には無いものであった。11は著者の結語だから、当然『明星抄』には無い。

このように、本書と『明星抄』との関係は、前半で近づき後半は離れ、かつまた源氏六十帖説、大般若經奉納や観音化身説の扱い等において、合理性を重視した注釈書とは逆に源氏伝説を強く打ち出し、登場人物の女性論でも鋭く



対立しているといえるだろう。更に冒頭で述べたように、『源氏のゆらい』は七五調を中心に律文形式でまとめようとしている点でも『明星抄』とは一線を画しているようである。以下、これらの特色について具体的に触れてゆく。

初めに、本書が七五調を中心にした律文形式の文体をもつという点については、夙に中野幸一氏が指摘され、その目的を「暗誦するに便ならしめたものと考えられる」と推論された。慧眼であろう。試みに、物語の発端として有名な高明左遷のくだりを『河海抄』⑦の記述と比較すると次のようになる（なお『明星抄』では「此物語の起りに付て説々ありといへとも、河海等にしるせる旨尤正義たるへし」として、以下上東門院への出仕、大斎院からの依頼へと展開する。よってここでは、『河海抄』を用いる）。

河海抄	『源氏のゆらい』（早稲田本）
<p>此物語のおこりに説々ありといへとも、西宮左大臣、</p> <p>安和二年、大宰権帥に左遷せられ給しかは藤式部おさなくよりなれたてまつりて、思なけきける比、</p>	<p>此物語のほつたんは、西の宮の左大臣かうめいこうと申せしは、たいごのみこにてましますか、紫式部おさなきよりいつくしきものにおもほして、てうあひあさからさりつるに</p> <p>思ひの外に彼おとゞ、だざいのそつにうつされて、ちんぜいへさせんし給ふをしきふかなしきことにして、ふかき思ひもむらさきのしたにこかれてなけく比、</p>

源高明の説明部分、『河海抄』の場合は安和の変の主人公に細かな説明は不要と判断したのだろう、単に「西宮左大臣」とのみ記してあるところを、『源氏のゆらい』では「かうめいこう」（音数を合わせるために音訓みしたものと

か」と氏名をあげ、醍醐天皇皇子であることを紹介。またその文章も、「西の宮の左大臣高明のおと、は、醍醐の皇子」(『為家本源氏古系図』序文)と記すだけでも充分意味が通りそうなところを、わざわざ「…と申せしは、…にてましますか」と長文化している。

左遷のくだりでも、『河海抄』が年号と左遷の事実のみを記しているのに対して、『源氏のゆらい』では肝心の年号は省き、代わりに「だざいのそつにうつされて、ちんぜいへさせんし給ふを」と、左遷の事実を言い換えて強調している。さらに式部が悲しんだ点について、『河海抄』が単に「思なけきける比」としたのに対して、『源氏のゆらい』では「ふかき思ひも、むらさきのしたにこかれて、なけく比」と文学的な言い回しになっている。結果、『源氏のゆらい』の文章は長文化したが、流れるようなリズムを獲得した。思うにこれらは、注釈書流の堅い文章を柔らく物語化したため、また覚えやすいよう暗誦の便を工夫したための結果かと思われる。

では、わざわざそう作り替えたねらいは何かといえ、おそらく、読者層に婦女子を想定したからであろう。『明星抄』との乖離はここに起因していたのではあるまいか。実際『源氏のゆらい』では、紫式部は観音の化身であり、濁世に現れたのは源氏物語を作るためであったとする。そしてその紫式部が作成した源氏物語は、「もつとも女のまなはんに、仏法世法のみちしるへ、何かは是にまざるへき」として、「たやすきやまとこと葉」で人生の真実が綴られた源氏物語こそ、真名文字にうとく難解な経典類を読めない婦女子にとって、仏法世法を会得できる格好の道しるべであると強調し、具体的な登場人物を挙げて実例を紹介する。即ち、朧月夜・女三宮・浮舟を「心かろきにて我身をたまためためしそと、のちの女のをしへなり」と評し、逆に過ちを犯してもその後出家した空蟬や薄雲女院、最後まで男性の求愛を拒み続けた朝顔齋院・宇治大君らについては、「是皆、善あくふたつの道を、<sup>(ママ)</sup>はきまへよとのいさ

めなり」と評して、源氏物語に登場する女性たちの生き様を紹介すると同時に、後代の女性たちへの処世訓へと展開させているからである。

源氏物語の登場人物たちから教訓性を読み取らせる指摘は、源氏注釈書の類には乏しかったが、南北朝頃には成立していたかとされる『めのとのさうし』や『身のかたみ』などの教訓書には既に散見するものである<sup>⑧</sup>。よって本書は、注釈書に記された硬く難解な源氏物語の概説を、律文形式で解りやすく解説しなおした作品であると同時に、注釈書の類では影を潜めていた源氏伝説を復帰させ、かつ源氏物語から女性が生きていく上での教訓を読みとるべく読者に示唆した、女性のための源氏物語入門書と位置づけることができるように思う。

なお、源氏物語関係書で律文形式でまとめられた先行作品としては、鎌倉時代の成立とされている伝安居院聖覚作『源氏物語表白』が有名である。同書は巻名を詠み込みながら五七調を主として展開し、そして最後は狂言綺語を翫んだ罪で地獄に堕ちた紫式部の救済を願って終わっている。五十四の巻名を詠み込むことによって源氏物語全体を網羅しようとし、法会の席上仏前で読み上げるものなので、リズムのある文章でまとめられたのだろうが、期せずしてそれが後代の読者にとっては、巻名を覚える格好の手だてとなり、謡曲『源氏供養』や、御伽草子の『源氏供養草子』『源氏供養物語』『石山物語』等に取り込まれていく要因となったものと思われる。

室町末期頃の成立かとみられる『源氏文字鎖』も同様である。同書は三条西実隆作とも後光明院作ともされている作品だが、七五調に五十四帖各巻の巻名を詠み込み、しかも尻取り形式でまとめて、暗誦しやすく作られている。実際、版本の跋文に「難波津浅香山のむかしを思ひ出て、おのかもとに詣て来て手習ふ女子の、せちにのそめるにまかせ、書てあたへつ、読習しめぬる……」<sup>⑨</sup>とあることから、和歌を学ぶ婦女子の読習本として活用されていたよう

ある。また巻名以外に、源氏系図なども、律文形式でまとめられたものがある。前述した文章系図『源氏系図小鑑』がそうで、同書はまた蛸兵部卿の子孫として、現行の五十四帖には見えない巢守君らを挙げている点でも注目されている資料である。

ことほどさように源氏物語が賞美され、時代と共に享受層も拡大し大衆化が進むにつれて、源氏物語の巻名や系図を、読みやすい律文形式にまとめ直した作品も誕生していった。江戸初期元和年間の成立である『源氏のゆらい』もまた、その系譜に連なる作品といえるだろう。但し同じ律文形式の作品でも、『源氏物語表白』『源氏文字鎖』が五十四帖説に拠っていたのに対して、『源氏系図小鑑』『源氏のゆらい』は六十帖説に拠っている。最後に、この点について触れておく。

『源氏のゆらい』では石山寺に参籠し、琵琶湖に映る月影を見て想を得、須磨・明石から書き始めたというくだりで、

…それより前後をつくりそへ、六十帖にとゝのえて、き斎の宮へたてまつりし。

とする。つまり紫式部が上東門院に奏上した源氏物語は六十帖だったと断定しているのである。また物語執筆の意図をのべたくだりでも

…四もんにも心をよせんなかだちとて、此物語の六拾帖すなわちてんだいの六十巻にへうせる也。

と繰り返している。尤も、紫式部という女房名の由来について諸説を紹介したくだりでは、

…又或説に、此女五拾四帖のその中に、むらさきのうへの御ことを、殊にすくれて書しゆへ、その名ありとぞいひつとふ。<sup>(ママ)</sup>

と、五十四帖説にも言及しているが、しかしこれは「或説」として紹介したものであるから、『源氏のゆらい』の基本姿勢は、やはり源氏六十帖説に拠っていたといえるだろう。そしてその根拠を四辻善成の『河海抄』に求めているのだが、しかし『河海抄』の当該箇所には、

其後次第に書くはへて五十四帖になしてたてまつりしを、権大納言行成に清書せさせられて、齋院へまいらせられるに、法成寺入道関白奥書を加られて：

とあって、『河海抄』を実際には披見していなかったことが分かる。

そもそも源氏六十帖説は、平安末期の『源氏一品経』に「紫式部之所制也。為卷軸六十卷」、「今鏡」〈作り物語のゆくへ〉に「六十帖などまで作り給へる」とあるように、十二世紀頃には既に流布していた説のようである。しかし親行が幕府に献上した河内本が五十四帖、藤原定家が家の証本として書写した青表紙本も五十四帖、さらには注釈書『河海抄』がはつきりと五十四帖説を打ち出すと、注釈学における大勢は五十四帖で固まったといえるだろう。『明星抄』も無論、石山寺伝説のくだりで「五十四帖になして奉りしを」とある。但し「大意」の項目の末尾に「凡此五十四帖は天台六十巻に比すと云」という文言を加えた結果、源氏物語は天台六十巻にならずえて作成された、しかし紫式部が書いた巻数は五十四であるという矛盾を抱え込んでしまったようである。そのためであろうか、『明星抄』では新たに「此物語五十四帖冊数事」という項目を設けて、

天台の本書に擬すといふ也。然らば天台の本書は、六十巻なり。今の物語は五十四帖也。不審あるに似たり。されども五十四帖にて六十巻にあたる甚深の義有由。故寂光院申されしを、子細はいまた尋窮めず。六十巻かきたるよりもかへりて深重の妙理ある事と云々。追可尋記也。

天台六十巻といふは……十巻づゝ六部都合六十巻也。されども此中に上中下あまたありて、七十巻にも及べ

き歟。されば天台六十巻といへとも、六十巻を出たれば、五十四帖にて六十巻を含める理もあるへし。又外典の俗書の中にも冊数の不足有之…。

という些か苦しい説明を施している。だが果たしてこの説明で万人が納得したかどうか。六十帖説がなおも命脈を保った一因はその辺りにあったのかもしれない。加えて御伽草子『小式部』に「石山にて、けんし六十くわんをつくり」、謡曲『源氏供養』にも「われ石山に籠もり、源氏六十帖を書き記し」等とあるように、源氏物語をとりまく周辺文化圏においては、紫式部が石山寺で天台六十巻によそへ源氏六十帖を作ったというイメージが確実に根付いていたようである。写本を入手して源氏物語を一読したことのない人、注釈書を読んだことのない人々の間では、むしろ六十帖説の方が浸透していたのではあるまいか。

そうした流れをうけてであろう、室町時代の『源氏大鏡』序文には

…折節八月十五夜の月、湖水にうつりて心すみわたるまゝに、物語の風情空にうかびけるをかきはじめて、天台六十巻にへうして巻の数をさだめ、桐壺より夢の浮橋にいたれり…<sup>10)</sup>

とあり、また江戸初期の「光源氏一部之歌 并詞」に

…おりから十五夜の月、水海のおもてにうかひてあきらかなるを見て、式部か心もすみやかになりて、かくのことく天台の六十巻にへうして、巻の数を六十帖にさため、巻ことに名をかへて…<sup>11)</sup>

神宮文庫蔵『源氏詞知』〈けんしのもくろく〉に

…おりから十五夜の月、みつうみのおもてにうかひ、くまなくあきらかなるをみるに、しきふか心もすみやかにきよくなりしかは、かくのことくてんたひ六十くわんによそへて、かすを六十てうにさため、まきことになをかへてつくれり…。

とあるように、源氏物語の梗概書・啓蒙書・入門書の一部にも同じような言説が取り込まれていったようである。また『源氏詞知』では、当初六十帖であったはずの源氏物語がなぜ現行の五十四帖になったのか、という点について

はしめは六十てうなりしか、すゑの世となりてあまりたいせつのまきなりとて、六てうすくりて、うちのほうさうにこめられしかは、いまはなをもしる人まれなり。そのまきのなをしるすを、けんしのもくろくといふなり。一きりつほ、二はは木き…二五まほろし、二六くもかくれ、これよりすゑ六てうは、うちのほうさうにこめられて、いまのよにわたらす。

二五より二七にうつるへし。二七かはるちうしやう、このまきをにほふひやうふきやうともいふなり…。

として、雲隠以下の六帖（巢守・桜人・法の師・ひはり子・八橋）は宇治の宝蔵に収められて今の世に伝わらないという解説まで付けている<sup>⑫</sup>。このようにみえてくるならば、『源氏のゆらい』には、『河海抄』『明星抄』といった所謂〈正統派源氏学〉からの流れがひとつ。また源氏伝説・教訓書などといった、前者を〈正統〉とするならば〈異端〉もしくは〈周辺源氏文化〉からの流れが一つ。この二つの水脈が流れ込んでいるとまとめられるようである。

## 注

(1) 池田亀鑑『源氏物語大成』巻七〈研究資料篇〉p一八三（昭和四六年 中央公論社）

(2) 諸氏これを「交記作」とするが、「更記作」とよむべきではないかと思われる。但し「更記」と読んでも、この人物について詳細は不明である。中野幸一「翻刻『源氏抄』」昭和四四年六月 早大国文学会「国文学研究」四〇輯所収。『源氏物語古注釈叢刊 第五巻〈源氏抄〉』（昭和五七年 武蔵野書院）。池田亀鑑編『源氏

物語事典 下』〈注釈書解題〉「源氏系図」項（昭和五八年 東京度出版）。稻賀敬二「源氏系図小鑑類の成立」

〔源氏物語の研究―成立と伝流―（増訂版）〕（昭和五八年 笠間書院）等参照のこと。

（3） 池田亀鑑編『源氏物語事典 上』（昭和五八年 東京堂出版）所収「注釈書解題」の〈源氏系図〉項。

（4） 稻賀敬二「源氏系図小鑑類の成立」（昭和五八年 笠間書院刊）『源氏物語の研究―成立と伝流―』所収。

（5） 引用は『源氏物語古注釈叢刊 第四卷』（昭和五五年 武蔵野書院刊）によった。但し句読点は稿者。以下同様。

（6） 中野氏前掲論文「翻刻『源氏抄』」参照。

（7） 引用は玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』（昭和四三年 角川書店）によった。以下同様。

（8） 例えば『めのとのさうし』の、義理を大事として「まづ女はふたりのおつとのかほを見ず」のくだり、源氏物語から二夫にまみえた人物として藤壺・浮舟・女三宮を挙げ、それぞれ次のように評している。

あしきはたらき見えてあれども、薄雲のよう院、御まゝこの源氏にあはせ給ふこと、これはみやづかへにてたちあふことなれば、わりなくこそ。つるに御心おちゐてみえず。さればやさしきかたにもなりぬべし。又うきふねはよるべたがへ、またはうこんじゝうがしいでたることなるべし。女三の宮ぞたまのうてなにかしづかれて、ちかづき参るべきやうもなきに、はゞしく、かるゞしくて、はしらかくれのおも影も見え、しとねの下のみみ、をきどころのかるゞしさ、かたゞとがにおとされ給ふ。それもしうをあなづり参らせてしいでたるなるべし。

（9） 引用は、大空社『往来物大系』所収本によった。但し句読点は稿者。

（10） 引用は『増補 国語国文学研究史大成 三（源氏物語 上）』（昭和五二年 三省堂）によった。但し句読点



は稿者。

(11) 引用は静嘉堂文庫蔵『源氏秘抄』(内題「光源氏一部之歌 并詞」)によった。なお天理図書館蔵『源語歌注』

(内題「光源氏一部之歌 并詞」)、神宮文庫蔵『源氏目録之和歌』等もほぼ同様である。

(12) 例えば、室町時代の作と思われる宮内庁書陵部蔵『源氏物語逸文注解(雲隱六帖)』奥書に、「雲隱六冊光源氏物語全部者也。雖然紫式部准史記評林、観音宝殿奉納之、誠菩薩之秘本、当寺重物也、…康平元年戊戌曆正月日 石山寺住持 大僧都信譽」とあり、また江戸初期の神宮文庫蔵『源氏拔書』に「(。始ハ)六十帖にすくりて宇治の宝蔵に籠られたりしかは(。今は)名をも智人まれ也。残る五十四帖今用意のこゝろ也」とあるのも、同様である。

## 二 影印・翻刻

### 【凡例】

一 上段に文芸資料研究所蔵『源氏のゆらい』の影印、下段にその翻刻を掲げた。

二 卷子本のため、翻刻の各行頭に通し番号を付しておいた。

三 翻刻に際して、異体字は通行の書体に改めた。

四 翻刻中次の各行は原本では次のように書写されている。

22 第22行目の「ふ」「姫」「の」「ん」の各文字は、文字の一部が料紙の繋ぎ目の上に記されている（紙を継いだ後に書写したのだろう）。

45 「く」の上に「かう」と重ね書きする。

85 「り」は、下字「れ」を擦り消した上に書く。

129 「たつき」は、下字「ほうし」を擦り消した上に書く。

130 「いさ」は、下字「この」を擦り消した上に、また「る事」は、下字「ゆへ」を擦り消した上に書く。共に目移りによる誤写に気づいて訂正したものだろう。

154 「よ」は、下字「に」を擦り消した上に書く。

175 「に」は、下字「乃」を擦り消した上に書く。

177 「毫」は、「斎（？）」の上に重ね書きする。

202 「真如覚」は、下字「善如（？）」を擦り消した上に書く。



源氏のゆらい

今いじりそちせんのかみ為時  
 してさきゆふやうにれめて  
 むさし式部か父なれやその人  
 源氏をつくり出こまかなる  
 ことはかり姫にかゝせたるなど、  
 かう治の大納の物語にみへ



【翻刻】

源氏のゆらい

- 1 今はむかしゑちせんのかみ為時
- 2 とて才覚ゆふにやさしきは
- 3 むらさき式部か父なれやその人
- 4 源氏をつくり出こまかなる
- 5 ことはかり姫にかゝせたるなど、
- 6 かう治の大納の物語にみへ

予も人女儀くへはてゝあかひ  
 こけん殿のあさきうたかひ也  
 されしうささき日記にもけふ  
 式部さといひて史記といふ  
 ふむとわたり内てん外てん  
 にくらからす天台一心三観の  
 けちみやくにもいと也しゆ  
 む徳院の御記にも光源氏の  
 物語紫式部書けるを一條院  
 御らんしてこはふかしきものそ  
 かし日本記をよくしりたりと  
 りんけんあるをねたまてや左  
 衛門の内侍のすけすなはち此  
 式部を日本記の局と名つけ  
 いひし也此人はしめはたかつかさ殿  
 まさのふ公の御姫みたうのくわん」(第一紙)  
 みちなかの北方にてましませ

- 7 たるは女のかくへきことならず
- 8 とほんふのあさきうたかひ也
- 9 そのむらさきの日記にもけふ
- 10 は式部さといひて史記といふ
- 11 文よむとあり内てん外てん
- 12 にくらからす天台一心三観の
- 13 けちみやくにもいと也しゆ
- 14 む徳院の御記にも光源氏の
- 15 物語紫式部書けるを一條院
- 16 御らんしてこはふかしきものそ
- 17 かし日本記をよくしりたりと
- 18 りんけんあるをねたまてや左
- 19 衛門の内侍のすけすなはち此
- 20 式部を日本記の局と名つけ
- 21 いひし也此人はしめはたかつかさ殿
- 22 まさのふ公の御姫みたうのくわん」(第一紙)
- 23 みちなかの北方にてましませ

しそれへまひりつかへしか御子  
 せうとう門院にあひつき官  
 女と有し也むらさき式部と  
 申名は一條院の御めの子藤  
 しきふにてありけるをささき  
 へまいらせらるゝとて我ゆかり也  
 といともかしこきちよくにより  
 むらさき式部と召れし也む  
 さし野、歌の心とそ清助  
 家の日記には藤式部と聞ゆる  
 はすこしゆうけんならずとて  
 藤のゆかりの色なればむらさき  
 字をそふとあり又或説に此女五  
 拾四帖のその中にむらさきの  
 うへの御ことを殊にすくれて  
 書しゆへその名有とそいひ

- 24 はそれへまいりつかへしか御子  
 25 しやうとう門院にあひつき官  
 26 女と有し也むらさき式部と  
 27 申名は一條院の御めの子藤  
 28 しきふにてありけるをささき  
 29 へまいらせらるゝとて我ゆかり也  
 30 といともかしこきちよくにより  
 31 むらさき式部と召れし也む  
 32 さし野、歌の心とそ清助  
 33 家の日記には藤式部と聞ゆる  
 34 はすこしゆうけんならずとて  
 35 藤のゆかりの色なればむらさき  
 36 字をそふとあり又或説に此女五  
 37 拾四帖のその中にむらさきの  
 38 うへの御ことを殊にすくれて  
 39 書しゆへその名有とそいひ

つとふ其きうせきはおほき町  
 南京西のつら東北院むかひ也  
 かの寺しやうとう門院の御所  
 のあと、そ聞えけるさてまた  
 式部はか所むらさき野、雲  
 りん院ひやく(かう)院の南にて  
 小野、高村はかのにしされは」(第二紙)  
 むらさき式部名もそのほとり  
 のゆう閑に兼て心やしめけん  
 とせうよう院のの給ふ也此物  
 語のほつたんは西宮の左大臣高  
 明公と申せしはだいごの御子  
 にてをわしますか紫式部  
 おさなきよりいつくしき物

- 40 つとふ其きうせきはおほき町
- 41 南京西のつら東北院むかひ也
- 42 かの寺しやうとう門院の御所
- 43 のあと、そ聞えけるさてまた
- 44 式部はか所むらさき野、雲
- 45 りん院ひやく(かう)院の南にて
- 46 小野、高村はかのにしされは」(第二紙)
- 47 むらさき式部名もそのほとり
- 48 のゆう閑に兼て心やしめけん
- 49 とせうよう院のの給ふ也此物
- 50 語のほつたんは西宮の左大臣高
- 51 明公と申せしはだいごの御子
- 52 にてをわしますか紫式部
- 53 おさなきよりいつくしき物

ぬすゝあひ浅からさつるに  
 もみのほかにかのおとゝた  
 さいのそつにうつされてち  
 むせいへ座せんし給ふを式部  
 かなしきことにしてふかき思ひ  
 紫のしたにこかれてなけく比  
 てんりやくの女十宮せんし内親  
 王と申せしかかもよりをりいさ  
 せ給ひ大齋院にてましますか  
 くわんこうのき齋宮へさるへき草  
 紙たまひて夜つれくまきれ  
 侍らんと御せうその有けるを  
 世にふるひたるはいかゝせん珍し  
 からん一ふしを式部そこにとも  
 かくもはからいてよとおほすれは  
 つゐてよきことにして高明公の  
 御ことをさいしやうさんけに

- 54 にてうあひ浅からさつるに  
 55 をもみのほかにかのおとゝた  
 56 さいのそつにうつされてち  
 57 むせいへ座せんし給ふを式部  
 58 かなしきことにしてふかき思ひ  
 59 紫のしたにこかれてなけく比  
 60 てんりやくの女十宮せんし内親  
 61 王と申せしかかもよりをりいさ  
 62 せ給ひ大齋院にてましますか  
 63 くわんこうのき齋宮へさるへき草  
 64 紙たまひて夜つれくまきれ  
 65 侍らんと御せうその有けるを  
 66 世にふるひたるはいかゝせん珍し  
 67 からん一ふしを式部そこにとも  
 68 かくもはからいてよとおほすれは  
 69 つゐてよきことにして高明公の  
 70 御ことをさいしやうさんけに

しやとまつ石山にまいりつ  
 事しやうしゆのきせいして七日  
 参籠したりしに比は八月十五  
 の名月こすいにつろひて千里  
 のほかもくまなきに書へき草紙  
 の品く式部かむねにうかひたり誠  
 に観世おんほさつの御りしやう  
 そとありかたくて忘ぬさきに  
 と佛前のはんにやのうらをひる  
 かへしまつすまあかしを書  
 し也是によつて須磨の巻  
 にこよひは十五夜也けりと思召  
 出てとありそれより前後を  
 つくりそへ六十帖にとゝのへ  
 てき齋の宮へたてまつりし  
 権大納言行成に清書をせ

- 71 かゝはやとまつ石山にまいりつ、
- 72 事しやうしゆのきせいして七日」(第三紙)
- 73 参籠したりしに比は八月十五よ
- 74 の名月こすいにつろひて千里
- 75 のほかもくまなきに書へき草紙
- 76 の品く式部かむねにうかひたり誠
- 77 に観世おんほさつの御りしやう
- 78 そとありかたくて忘ぬさきに
- 79 と佛前のはんにやのうらをひる
- 80 かへしまつすまあかしを書
- 81 し也是によつて須磨の巻
- 82 にこよひは十五夜也けりと思召
- 83 出てとありそれより前後を
- 84 つくりそへ六十帖にとゝのへ
- 85 てき齋の宮へたてまつりし
- 86 権大納言行成に清書をせ



させては法性寺の入道殿のく  
 書にて大齋院へまいらせら  
 る、事じやうしゆのその後  
 にはんにや一部をむらさき  
 式部一筆にしよしやしつ、  
 ほうなうし奉るよしし成公の  
 か、いにもくはしくしるし置給すへ  
 て此むらさき式部はくわんおん  
 さつたのけしんにて女人のりん  
 糸浅からぬくかいのまとひをすく  
 はんとしやうぐぼだひの光をやはら  
 げせ、しゆしやうのにこりにし  
 み塵にまはしり給へともあらゆる」(第四紙)  
 君子五常の道までしやくもんの  
 五かいの法もさらに聞み、とをふ  
 してぐちの心に入かたしそれ

- 87 させて法性寺の入道殿のく  
 88 書にて大齋院へまいらせら  
 89 る、事じやうしゆのその後  
 90 にはんにや一部をむらさき  
 91 式部一筆にしよしやしつ、  
 92 ほうなうし奉るよしし成公の  
 93 か、いにもくはしくしるし置給すへ  
 94 て此むらさき式部はくわんおん  
 95 さつたのけしんにて女人のりん  
 96 糸浅からぬくかいのまとひをすく  
 97 はんとしやうぐぼだひの光をやはら  
 98 げせ、しゆしやうのにこりにし  
 99 み塵にまはしり給へともあらゆる」(第四紙)  
 100 君子五常の道までしやくもんの  
 101 五かいの法もさらに聞み、とをふ  
 102 してぐちの心に入かたしそれ



相中道の有門空門亦有亦空  
 門非有非空門の四もんにも心  
 ばよんかちとて此物語  
 の六拾帖とれとてんぞ  
 以の常春一とてあて  
 もわに空人後深ゆを  
 ちとてわてかちとて  
 半かちとてかちとて  
 ちてれをそとて四書入  
 經一とてあてれとて  
 書一とてあてれとて  
 心むゆまかちとて  
 わしとてゆかちとて  
 ばとてんこけれとて  
 せん宗とていのかなし  
 是みないんよくふたうによつて

- 118 相中道の有門空門亦有亦空  
 119 門非有非空門の四もんにも心  
 120 をよせんかたちとて此物語  
 121 の六拾帖すなわちてんだ  
 122 いの六十巻にへうせる也たゞ  
 123 おほかたに聞人の源氏はこう」(第五紙)  
 124 しくはかりにて女のみるへき  
 125 事ならずといへるはこゝろあ  
 126 さき也礼義をたゝす四書五  
 127 經にもなをゐんらくのことを  
 128 書しかるにいんのちう王はたつきが  
 129 いさむる事によりしうのゆう王は  
 130 ほうしかこのむゆへにまかすあつ  
 131 のこうせんこ此うれへたうの  
 132 げん宗はくわいのかなしひ  
 133 是みないんよくふたうによつて

ちさしからすさるいましめ也  
 は物語もなを同しかのほそ  
 殿にあくかれ出しをほろ月  
 よにしくものもなき露の  
 かり枕行衛は須磨のうらみと  
 なるしん殿のからねのなかきき  
 つなをひきいてし侍従かくいの  
 八千度もかへらぬむかしかたりに  
 ていつの時にかいひはてん身をう  
 き舟のよるへをもしらてた  
 たよふ水のあわのきえかへりに  
 し世のうらみつらしといふも  
 あまりあり是また心かろき  
 にて我身をたもたぬため  
 しそとのちの女のをしへ  
 也又空蟬のあま衣ひとへに(第六紙)  
 ていちよのみちをたて二夫に

- 134 ひさしからすさるいましめ也  
 135 此物語もなを同しかのほそ  
 136 殿にあくかれ出しをほろ月  
 137 よにしくものもなき露の  
 138 かり枕行衛は須磨のうらみと  
 139 なるしん殿のからねのなかきき  
 140 つなをひきいてし侍従かくいの  
 141 八千度もかへらぬむかしかたりに  
 142 ていつの時にかいひはてん身をう  
 143 き舟のよるへをもしらてた  
 144 たよふ水のあわのきえかへりに  
 145 し世のうらみつらしといふも  
 146 あまりあり是また心かろき  
 147 にて我身をたもたぬため  
 148 しそとのちの女のをしへ  
 149 也又空蟬のあま衣ひとへに(第六紙)  
 150 ていちよのみちをたて二夫に

まみえぬ心さし誰かは是を  
 ほめさらんさてかのうす雲女院  
 は一夜のまとひより身を  
 うき物におもひこり御世を  
 そむき給ひしも是らそまこと  
 のけんちよなる朝かほの齋院  
 のをりゐののちもいつとなく  
 いつきの宮をかことにてなひ  
 き給はぬつれなさもげに  
 たくいなき心かなさてまた  
 う治の大君のわか身にかへて  
 はらからを思ひのやみにかき  
 くれて此世をはやうし給ふ  
 もいかてかあはれ浅からん是  
 皆善あくふたつの道をはきま  
 ゑよとのいさめなりもつとも女  
 のまねはんは佛法世法の

- 151 まみえぬ心さし誰かは是を  
 152 ほめさらんさてかのうす雲女院  
 153 は一夜のまとひより身を  
 154 うき物におもひこり御世を  
 155 そむき給ひしも是らそまこと  
 156 のけんちよなる朝かほの齋院  
 157 のをりゐののちもいつとなく  
 158 いつきの宮をかことにてなひ  
 159 き給はぬつれなさもげに  
 160 たくいなき心かなさてまた  
 161 う治の大君のわか身にかへて  
 162 はらからを思ひのやみにかき  
 163 くれて此世をはやうし給ふ  
 164 もいかてかあはれ浅からん是  
 165 皆善あくふたつの道をはきま  
 166 ゑよとのいさめなりもつとも女  
 167 のまねはんは佛法世法の

みちしるへ何かは是にまさる  
 へきことはこうしの春秋に  
 よせ心はさうしがくうけんにて  
 いづれの御ときにかとた、お  
 ぼをぼと書出しあるにもあら  
 すなきにもあらぬは、木、  
 のこと葉を一部にわたるかん  
 しんにてうたかた夢のうき」(第七紙)  
 はしと書なかしたる毫のあと  
 はなはたひろくそこふかしされは  
 佛の三しゆのせつ法ほさつのろく  
 としやくもんの四たいえんかくの  
 十二めんえんまでみな此ことに  
 さとらしむまことにじんく  
 みめう也思へはくふしき也此  
 代一世の事ならしとかも

- 168 みちしるへ何かは是にまさる  
 169 へきことはこうしの春秋に  
 170 よせ心はさうしがくうけんにて  
 171 いづれの御ときにかとた、お  
 172 ぼをぼと書出しあるにもあら  
 173 すなきにもあらぬは、木、  
 174 のこと葉を一部にわたるかん  
 175 しんにてうたかた夢のうき」(第七紙)  
 176 はしと書なかしたる毫のあと  
 177 はなはたひろくそこふかしされは  
 178 佛の三しゆのせつ法ほさつのろく  
 179 としやくもんの四たいえんかくの  
 180 十二めんえんまでみな此ことに  
 181 さとらしむまことにじんく  
 182 みめう也思へはくふしき也此  
 183 代一世の事ならしとかも

源氏のゆらい 平家俊成の  
 六百番の歌合の其判にも歌  
 人の源氏みさらんはいこんの事也  
 とそか、れたるくわんこうの初  
 つくり出元和のけふにいたるま  
 てをよそ六百十余年時うつ  
 りことされとも代／＼けん王  
 知臣いつれかせうひし給さる  
 いはんや女の身となりて何  
 おろそかに思ふへき此物語に  
 心をかけあしきをはあしきと  
 しりよきをはよきと心へて  
 くわんせんてうあくし給は、  
 神明佛たのおふこなかく此  
 世のゑい花とこしなへに終は  
 りやうぜんじやつかうの

- 184 の長明かんにたへす俊成卿  
 185 六百番の歌合の其判にも歌  
 186 人の源氏みさらんはいこんの事也  
 187 とそか、れたるくわんこうの初  
 188 つくり出元和のけふにいたるま  
 189 てをよそ六百十余年時うつ  
 190 りことされとも代／＼けん王  
 191 知臣いつれかせうひし給さる  
 192 いはんや女の身となりて何  
 193 おろそかに思ふへき此物語に  
 194 心をかけあしきをはあしきと  
 195 しりよきをはよきと心へて  
 196 くわんせんてうあくし給は、  
 197 神明佛たのおふこなかく此  
 198 世のゑい花とこしなへに終は  
 199 りやうぜんじやつかうの

妙法蓮華のうてなのへに  
 真如本覺しゆせう妙樂夢  
 夢うたかひあるへからすとぞ

- 200 妙法蓮華のうてなのへに  
 201 真如本覺しゆせう妙樂夢」(第八紙)  
 202 夢うたかひあるへからすとぞ  
 203 (以下余白)」(第九紙)